

新潟県における縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての生業行動
Occupational action from the close of the middle to the beginning of latter Jomon
in Niigata

学籍番号 36741
氏名 増田 洋基 (Masuda, Hiroki)
指導教員 佐藤 宏之 助教授

、当該期の様相と問題点の所在

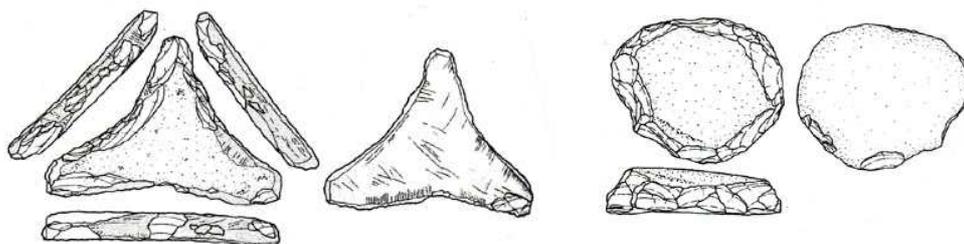
縄文時代中期に爛熟した中部・甲信越地方の縄文文化は一転、中期末葉から『壊滅的』と称される転機を迎えるとされる。それまで巨大な環状集落や遺物を数多く残し、最も繁栄したとされた社会は急速に痕跡を薄くする。中心地とも言えた長野県内の遺跡数は落下と呼ぶに相応しい下降線を辿り、以後減少の一步をたどっていく。この現象は中期末葉から後期初頭にかけての当時に起きたと考えられている気候の冷涼化・湿潤化に関係しているとされてきた。その範囲でも地域差が無いわけではない。富山県内では沿岸部で中期から後期初頭へ継続して営まれる遺跡のケースが多く報告されている。新潟県内では山間部においても、中期末葉から後期初頭の移行期に存続性を有する遺跡が寧ろ一般的であるとまでされる現状がある。この様に一部には、寒冷湿潤化の時期に遺跡の規模・数が大きく縮小するという大局的な現象にそぐわない場合も認められる。これらは当該期の異変に対して、非常に示唆的だと推測される。遺跡の多くが姿を消す中で営まれ続けられた要因を探る事は、恐らく起きていただろう気候変化への適応行動の一端を明らかにする事と同義でもあるからである。

富山県での沿岸部においては、海産資源の積極的開発が原因であろうと見込まれている。また縄文時代後期における低地への進出、そこでの石鏃類の卓越は房総半島や離島において類似のケースがある。一方、新潟県内での山間部における中期からの遺跡残存性については、管見では未だこれといった説や考察はない。本論では山間部という中期に繁栄した土地条件を意識して、新潟県内に着目した。県内でも取り分け奇妙であるのは、信濃川中・上流域一帯である。他の地域では磨石類或いは打製石斧が主体という中期に特徴的な石器組成から、石鏃類を主とした組成に変遷していくのに対して、問題とする地域では遷移が緩やかである。中期末葉～後期初頭にかけて組成にバリエーションが生まれるも、結果的には打製石斧や磨石類を一定量持ち続ける。まずはその理由を探った。

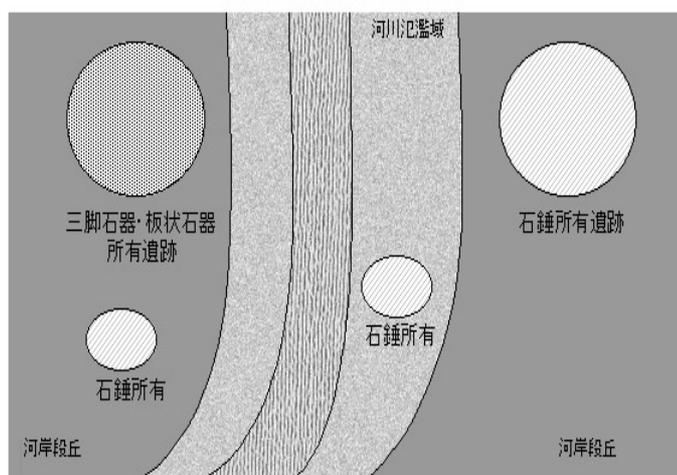
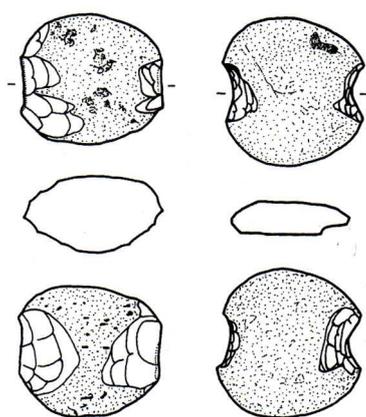
、特殊性ある石器の分析

地域的な特色を探し出す為に、まず当該地域で特殊な石器を考察した。板状石器と呼ばれるものである。形状等に規格性が高く、使用痕の観察からは裏面と刃部を仕様して、何

かを『擦る』『削り取る』ものと推定される。石材は柔らかく、硬質のものを加工するには適していない。未製品から使用痕を有するもの、破棄された物まで集落ないで出土することから、植物等への加工具であろう。この石器は使用痕・形状の類似から三脚石器と出自及び機能を同じくしているものと考えられる。板状石器を有する遺跡は、遺跡数減少期を跨いで存続する場合が多い事から、何らかの生業活動等に関与すると想定される。また板状石器をある程度の数で有する遺跡は大規模なものとなる。



次に板状石器と関係性を持つ石器を抽出し、礫石錘との出土の在り方に注目した。一般的に編物錘とされる礫石錘であるが、新潟県内では土器片錘の不在や前期沿岸部・平野部での多量な出土、また河川付近で検出される事から漁網錘としている。礫石錘は簡単なうち割りで縄かけ部を両端に設える、非常に便宜的な漁労具であり、石器素材も殆どが安山岩や砂岩など、河原石という漁労を行なう現地で採取されるものである。故に利用地から基本的に移動しないと考えられる。新潟県では河岸段丘上或いは河川氾濫域に小規模遺跡が多い。礫石錘の性質はこのようなキャンプサイトの場所に多く、また大規模集落で希少である事実に符合する。



この礫石錘と板状石器は中期末葉を境に、大規模・拠点的な集落の内でも共存するようになるのが城之腰遺跡、中道遺跡、岩野原遺跡等から確認される。また石器組成上では副次的

な割合であるものの出土数も増加し、管理的漁労具も現れる。このように礫石錘が居住を旨とするような遺跡からも大量に出土するようになったのは何故か。一方三脚石器は後期初頭以降消滅し、同じくしていた機能は板状石器に集中したものと考えられる。

、モデルの適用による考察

花粉分析の報告に従えば、当時の植生と現在の奥三面地域のそれは同じくコナラ亜属・ブナ属などを主とする冷温帯林である。この点から奥三面の民俗事例を元にモデルを考察した。結果として広汎な範囲で認められるだろう行動、冬集落と漁場付近の借り小屋を季節的に移動する離散集合が認められた。これに従えば、板状石器を有するような拠点集落は越冬するのを目的としていた。そこに内水面漁労の現地で生産される礫石錘が出現したのは、漁労活動の期間が時間的に延長された事を示唆しているのではないだろうか。管理性が極めて弱い礫石錘が前もって用意されるとは想定し難い。また網漁は基本的な機能として遡上性のない地雑魚を対象とするので、画期的な生産は見込めない点も重要だと思われる。板状石器はこの構図であれば、冬季に漁網等の繊維製品の生産を行っていたと仮定しているが、実証的なデータは未だない。しかし内水面漁労活動の活発化と歩みを同じくしている点を重要視すれば、ある程度の妥当性はあると思われる。

結論 中期末葉から後期初頭にかけての生業行動の変化から

中期末葉から後期初頭にかけての、信濃川水系域での石器組成のバリエーションを踏まえれば、板状石器への機能集約化及び礫石錘の拠点集落での登場は、寒冷湿潤化に適する為に実施された多様な行動の一環であった。中期末葉以前と比較して、植物性食料に集約化するのではなく、より開発する資源の幅を広げた物と考えられる。そうであるならば、狩猟・採集活動の場であった小規模遺跡の規模は小さくなる事が予想される。寒冷湿潤化は資源の分布を季節的にも空間的にも偏在させようから、移動する頻度が高くなる為である。一方当該期の新潟県、特に信濃川中・上流域は開発する対象に内水面漁労活動も積極的に選択した。漁場は場所がある程度特定される資源を有する空間であるから、それを大規模遺跡でも行なった為に高い存続性を有していたのではないだろうか。新潟県内における遺跡数の減少傾向と大規模遺跡の存続性が並び立つ理由を、現状ではこう結論付けている。